

マンボウ専門雑誌

うきうき

第1号



発行：マンボウなんでも博物館

2014年8月



もくじ

👉 マンボウ専門雑誌「うき」発刊によせて 海星夏輝 2

【研究の部】

👉 マンボウの漁獲時と漁獲後の体色変化 海星夏輝 4

【芸術の部】

👉 マンボウ至上主義 愛理香 6

👉 マンボウ川柳 7

【情報の部】

👉 発見！ヤリマンボウのモニュメント 海星夏輝 8

👉 投稿規定 9

👉 編集後記 海星夏輝 10

マンボウ専門雑誌 「うきうき」 発行によせて

海星夏輝

きっかけとなったのは

子供の頃、物心がついた時には既にマンボウが大好きになっていて、中学から大学まではその意識が薄れていったものの、卒業論文を書く時期に、再びマンボウが好きだと自分で再認識してから早9年。気が付いたら研究者になっていた。フィールドは日本のみならず、アジア圏、ヨーロッパ圏を飛び回った。時間はあっという間に過ぎていた。しかし、マンボウを自由に研究できる時間は残すところあとわずか。博士論文をまとめるにあたり、一度この研究は区切りを付けなければならぬ。

私が費やしてきたこの9年間、マンボウ研究の世界において、様々な可能性の広がりをみせた時代でもあった。

研究と謎

一つはDNA解析。これは私の研究テーマの一つであるマンボウ類の分類と深くリンクする。研究を始めた当初は、マンボウ属の中に遺伝的に遠く離れた集団が複数見付かり、分類学的再検討を行う必要があるのではないかと提唱され始めた時代だった。あれから世界中のサンプルを集め、そろそろこの問題に決着を付けるつもりで、今は分類学の祖であるリンネの時代まで遡って文献を読み漁っている。

もう一つはバイオロギング。マンボウに記録計を付けてデータを取得する手法だ。データロガーの小型化と普及により、回遊経路を探る研究が世界中に広まり、少しずつ成果をあげている。

しかしながら、それでもマンボウはまだまだ謎めいている。調べれば調べるほど、確かに情報は蓄積されていくのであるが、同時に、この魚について、何もわかっていないことがわかったのである。例えば、今では全国各地の水族館でマンボウは当たり前のように飼育されているが、誰もその成熟卵を見たことは無く、自然下で何を食べているのかもよく分かっていない上に、水槽の中で泳いでいる種類さえ曖昧な状態が

この状況を打破するには、研究を進めることが重要なのは間違いないが、兎にも角にも情報が不足している。しかし、私一人では手が足りない。そこで、幅広く情報を収集すると同時に発信し、共感・共有してくれる仲間を集めることが大事だと気が付いた。

サークル活動

研究とは異なるもう一つの活動として、サークル「マンボウなんでも博物館」をつくった。本サークルの目的は、マンボウに関するありとあらゆる情報を収集・蓄積・発信する事である。残念ながら現状は、私個人がその時の気分で活動している状態だが、イベント参加を通じて、少しずつマンボウの輪を広めていきたいと考えている。

マンボウの研究はハッキリ言って簡単ではない。特に、たくさんさんの標本を必要とする生態や形態の分野では、科学的信頼性を得るために、たくさんさんの標本を調べる必要があるが、その過程でいろいろな気が付くことがある。学術的価値は低いけどピクとして面白かったり、一般の人が知らないような小さな発見を、捨てるのはもったいないので拾おうと思った。

そこで考えたのが本誌である。ちょうど博物館という名前でサークル活動していることもあり、活動報告をまとめるにも、私の小ネタを披露する場にも活用できる。一般からの投稿も受け入れ、本誌を通じてより深くマンボウについての知識を深め、仲間と共有することができたら、私はそれ以上言うことは何も無い。本誌の構成は悩んだ末、「研究の部」、「芸術の部」、「情報の部」の3つのテーマに分けることにした。

【研究の部】は投稿者自身が研究したマンボウに関する成果を披露してもらう場。

【芸術の部】は投稿者自身が創作したマンボウ作品を宣伝してもらう場。

【情報の部】は投稿者が見付けたマンボウに関する情報を紹介してもらう場。

今後、本誌の方向性は変わってゆくかもしれないが、すべての活動の足掛かりとして、この度、第一号を発刊する。

本誌の名前である「うき」とはマンボウの地方名であり、今はほとんど呼ばれていない古語である。この言葉の由来は、水面に浮く亀や木(浮亀・浮木)で、日本らしい風流な例えに感嘆して本誌の名前に採用した。将来、本格的なマンボウの博物館をつくることを目標として、地道に活動していこうと考えている。

< イベント活動履歴 >

2013年11月2日 「第1回生きものまーけっと」の様子。▶
記念すべき第1回目のサークル活動。
多くの方にマンボウの干物を触って頂いた。



◀ 2014年6月29日 「2014ゆかたまつり
「和着逢々」」の様子。
2回目のイベント。助っ人を呼んで、広島大学のフリーマーケットに出店した。

マンボウの漁獲時と漁獲後の体色変化

海星夏輝

諸言

マンボウはフグ目マンボウ科に属し、世界最大級の硬骨魚類の一つである(山野上・澤井, 2012)。マンボウは風変わりな外観を持つことから水族館などで人気のある魚だが、水産的価値は低い。魚体が大きくなることから研究が困難なため、本種におけるあらゆる知見は非常に不足している。マンボウは体色を変化させることができるのは知られているが(白井, 2002)、体色変化に関する詳細な研究は見当たらない。また、漁獲時の体色と漁獲後の体色の変化については知見がない。そこで本報告は、マンボウの漁獲時と漁獲後の写真を比較し、体色変化について考察した。

材料と方法

本報告に用いた個体は、2011年5月29日にイタリアのカモーリ(44°20'N, 09°09'E)で定置網によって漁獲された全長40cmのマンボウ *Mola* sp. B (mtDNAによる遺伝解析済み, 私信)である。漁獲時に撮った写真と26分後に再度撮った写真(撮影場所は少しズラした)を比較した。

結果と考察

漁獲時の写真と比較して26分後の写真は、全体的に黒色が減り、色が薄くなっていた(臀鰭の根元を見ると、白色が広がっているのがわかる)。この体色の退色により、体の傷がより目立つようになった(図1赤矢印)。また他の変化として、体表の粘液が少し増えていた(図1黒矢印)。この体色の退色や粘液の増加は、一般的な魚の死後硬直後～腐敗初期に入る前段階の反応である(岡田, 1984)。マンボウは水分が多く、身が傷みやすいため、一般的にあまり市場には出回らない魚であり(伊勢志摩経済新聞, 2008)、本報告の結果を見ても約30分で死後硬直後の特徴が出ていることから、マンボウは死後腐敗が比較的早く進む魚であることが考えられた。本報告は1個体だけの結果であるため、他の漁獲個体においても時間とともに体色が薄くなっていくのかは、さらなる検証が必要である。

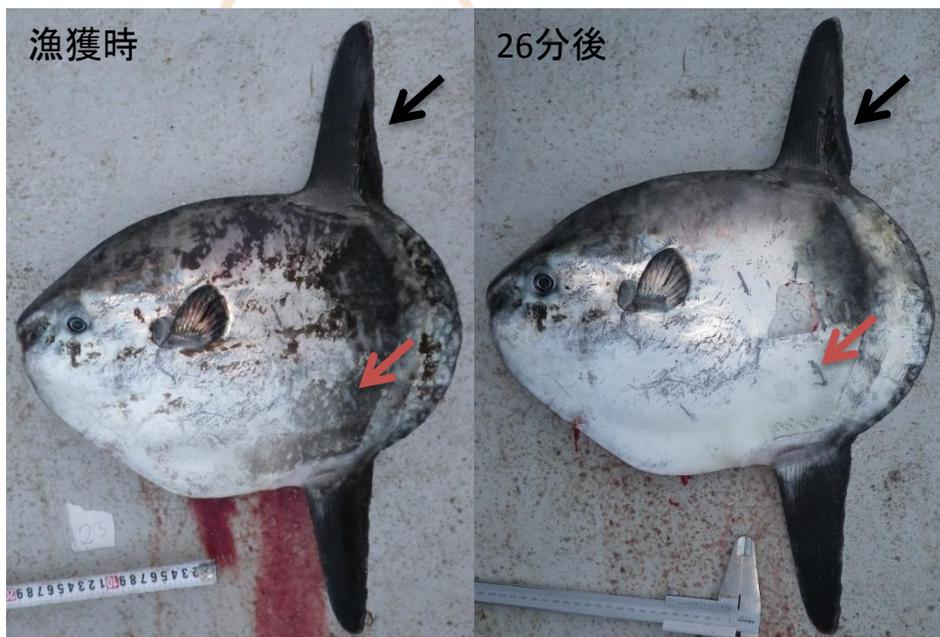


図1. 漁獲後の体色変化。漁獲時(左)、左の写真撮影時から26分後(右)。黒矢印は粘液、赤矢印は体の傷を示す。

謝辞 イタリアでのマンボウのサンプリングにご協力を頂いた地元の漁師達に感謝する。

引用文献

伊勢志摩経済新聞. 2008. 「マンボウの干物」人気に火が付くー南伊勢町の干物店が商品化.
<http://iseshima.keizai.biz/headline/607/>

岡田 稔. 1984. 魚肉の鮮度. 日本食品工業学会誌, 31(9): 617-618.

臼井由治. 2002. 「地球！ ふしぎ大自然 マンボウが跳んだ 東太平洋大追跡」取材記. 映画テレビ技術, (594): 26-29.

山野上祐介・澤井悦郎. 2012. マンボウ研究最前線—分類と生態, そして生物地理. in: 松浦啓一 (編)『黒潮の魚たち(叢書・イクチオロギア 2)』, 東海大学出版会, pp. 165-182.